

かぼちゃ(普通)

栽培暦

月	2	3	4	5	6	7	8
作型							
露地		播種	× 定植	摘心 しき わら	整枝 人工 交配		収穫

栽培の特徴とポイント

梅雨時期の防除及び排水対策を徹底し、疫病の発生を最小限に食い止める。吸肥力の強い作物なので、チッソ過多によるつるボケに注意する。地力を高め生育後半の肥切れを防ぐとともに、防除を徹底しうどんこ病の発生を抑える。

果実に直射日光が当たる場合は、日焼け防止対策を実施する。

品 種

えびす：草勢、吸肥力とも強く多肥栽培をすると過繁茂になり易い。果重は1.7～1.9kg（タキイ）と大きいやや晩熟である。開花後45～50日で収穫。

ほっこりえびす：肉質は「えびす」より粉質甘味が強い。「えびす」より5日早生。果重は（タキイ）1.6kgとえびすよりやや小さい。開花後45日で収穫する。

味平：強粉質、高糖度、果重1.7～1.8kgの扁円果でよく揃う。果肉は濃黄色で厚く、（協和）開花後40～45日で収穫する。

育苗管理

1 播種量

10aあたり3デシリットル（1デシリットルは約150粒）

2 播種

12cmポリポットに園芸床土を詰め、1ポットに1粒ずつ播種する。覆土は1cm程度とする。

播種後ハウス内トンネル育苗で保温する（播種時期が早い場合は電熱線をハウス内に張り、地温を高めておく）。

3 播種後の管理

発芽揃いを良くするため、発芽まで新聞紙をかける。床温は 25～28 を目標に保つ。発芽したら早めに新聞紙を除去する。発芽後は地温 15～20 を目標に管理し、気温は 30 以上にならないよう注意する。かん水が多いと徒長するので、水のやりすぎに注意する。葉に水がかからないように、ホースの先に塩ビパイプを取り付け株元にかん水する。

4 低温短日処理

花芽分化促進のため、低温短日処理を行う場合は、本葉 3 枚頃までに行う。

[低温] 夜温 10～12 [短日] コモで日長を 8 時間に制限する

5 苗の順化

定植 1 週間前から徐々に外気にあて、かん水は控え気味にしてしっかりした苗に仕上げる。

6 育苗日数

30～35 日程度で本葉 4～5 枚がよい。老化苗は定植後の活着が悪い。

本ば管理

1 施肥例 (kg / 10 a)

肥料名	基 肥		追 肥		成 分 量		
					N	P	K
堆 肥	2000						
苦土石灰	140						
熔 燐		20				4.0	
緩効性化成		40	30		7.0	7.0	7.0
速効性化成		5		30	5.6	3.5	4.9
					12.6	14.5	11.9

基肥 は耕起前に全面施用する。基肥 は定植 7～10 日前にマルチ幅に施す。

追肥 は着果直後に施す。追肥 は 1 番果収穫後に施す。

2 畝立て、マルチ

1) 畝立て、マルチ

作業は定植 5～7 日前に行い、地温を上げておく (12 以上)

マルチを張る位置に基肥 を施用後畝立て、マルチを行う。(マルチ幅: 90cm) 畝立て時にほ場の周りに額縁排水溝を設置する。

2) 除草剤散布

畝立てマルチ後に、マルチ以外の場所に除草剤を散布する。

3) 栽植密度

畝幅 270cm × 株間 100cm 1 条 350～400 株 / 10 a

3 定植

1) 定植時期 4月下旬～5月上旬

かぼちゃはウリ類の中でもっとも霜害に弱いので、極端な早植えを避ける。遅霜の恐れのある時は、ホットキャップや不織布等で保温に努める。

2) 定植

定植日の午前中に苗床に十分かん水しておく。定植は風のない温暖な日を選び、できるだけ根鉢をこわさないようにていねいに植え付ける。定植後風よけに白寒冷紗のトンネルがけを行う。トンネルの除覆は5月下旬頃とする。

4 摘心

活着後、本葉5葉を残し摘心する。

5 敷きわら

つる先がマルチより出始める頃(つる長1mの頃)、敷きわらをする。敷きわら用の資材が調達出来ない場合、黒の遮光ネットを被覆しても良い。

6 整枝

子つる4本を残し、つるが重ならないよう等間隔に配置する。つるが混み合い葉陰が多くなると充実した雌花が確保できないので1番果の着果まで孫つるは小さい内に除去し、着果の促進や過繁茂の防止による生産安定を図る。着果後は放任とする。

7 着果

1番果の着果節位は10節前後とし低節位、変形果は早めに摘果する。草勢により着果節位を変える。目標着果数は1つる2果とする。

8 人工交配

開花期が梅雨時期のため低温や曇雨天が続くと草勢が強くなり、着果が不安定になるので人工交配により確実に着果させる。花粉の発芽率は時間とともに低下するため、交配作業は午前8時までには終える。受粉は柱頭にむらなく行い、乱形果の発生を防ぐ。

ホルモン剤の使用は、果実の肥大不良や品質の低下を招く場合があるので注意する。

9 マット敷き

土と果実の接する部分が黄色くなったり、腐敗する恐れがあるので、着果後15～18日で果色がやや黒緑色に変化した頃にフル-ツマツ(中)を果実の下にていねいに敷く。あまり早くから果実にさわると、落果することがあるので注意する。

10 玉直し

収穫10日前に着色ムラを防ぐため玉直しを行う。果梗が短いのでていねいに行う。

11 収穫

開花後40日(積算温度900)を目安とする。果梗にひび割れが4～5本入り、果皮の色が黒緑色となりつやがさめてきた頃が適期。未熟果は食味が劣るので、完熟果の収穫を徹底する。

雨天、朝露時の収穫は避ける。果梗はできるだけ短く切りつめる。

12 調 製

屋内で5日風乾して果面・果梗を乾燥させ、腐敗果の出ないことを確認の上、出荷する。

病虫害防除

アブラムシが発生するので、発生初期より防除を実施する。ミツバチ等訪花昆虫により受粉させる場合、この交配期間中にやむを得ず防除を行う場合は訪花昆虫の活動時間帯を避け、午後からの防除とする。

うどんこ病やべと病、疫病が発生するので、排水対策の徹底としきわらにより土の跳ね上がりを防ぐ。病害発生前から予防防除を実施する。

販売のポイント

市場の信用を落とす腐敗果（疫病等罹病株）を絶対に混入させない。
完熟果の出荷を徹底する。